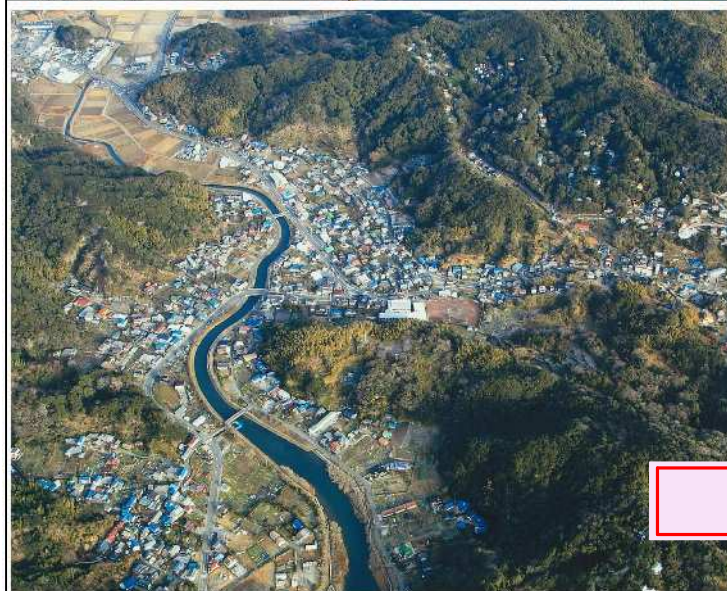


地域の防災意識を高める 小学生の『逃げ地図づくり』



地元の建築家と朝日小学校の子供たち



静岡県下田市吉佐美地区

■ ■ ■ きっかけは防災キャンプ ■ ■ ■



伊豆半島先端に近い静岡県下田市吉佐美地区は 南海トラフ大地震の際 津波高さが海岸で最大約30m。1km離れた小学校のグラウンドで浸水想定高さが6m。津波災害の危険地域であると公表された地域である。住民も当然そのことを理解はしているが、東日本大震災から1、2年が過ぎた頃、具体的にまちの防災対策は何もなされていない状態だった。この地区で建築の設計事務所を構えている私としては、なんとか この状況を変えることはできないものかと常々考えていた。

そんなおり 近くの朝日小学校で防災キャンプが開催された。何気なく参加したその中で初めて逃げ地図を知った。1/2500の地図上で道に色塗りをして 避難時間を可視化する作業である。ふと自分が住んでいる辺りは大丈夫かなと思い、とりあえず自分で逃げ地図を作ってみることにした。指定された数箇所の一時避難場所までの道を129m毎に色分けし、その妥当性を検証してみた。大津波から避難する際に多少の問題点が潜んではいるが、概ね適切な位置に一時避難場所が配置されていると分かって少し安心した。

この経験から、『逃げ地図づくり』をより多くの住民と一緒に行うことができればこの地域の防災対策に活用できる。そんな思いを強く持つようになった。

そこで 防災キャンプに来ていた学生にアポイントをとり、逃げ地図づくりの推進活動がされている 千葉大・明治大学の先生方を招いてワークショップを開催する企画を立てた。



2013年8月 静岡県下田市立朝日小学校で行われた防災キャンプ。体育館で明治大学の学生が『逃げ地図』について説明していた。



地元の建築家(私)が最初に作った吉佐美地区の逃げ地図

逃げ地図ってなんだろう？

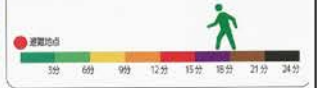
みんなで一緒に地図づくり

逃げ地図ワークショップでは、地域のみんなで集まって防災のための地図づくりを行います。小学生から高齢者までが一括に作業をすることで、地域間のコミュニケーションを円滑にし、地域全体の防災意識を高めます。



避難地点までの時間を色で理解

逃げ地図の特徴は、目標避難地点までの時間を色で表すところにあります。道路が色塗りされることで、直感的に危険な場所を理解することができます。



気になることは共有

「あの道は雨が強くなると歩けなくなる」「万が一の時は私の庭を避けて歩かない」など、作業しながら思い浮かんだことは付箋に書いて共有します。また幾つかの避難場所を想定するなど複数の状況に対する逃げ地図を作り、発表会にて意見交換を行います。



逃げ地図ワークショップ 紹介パンフレットより



吉佐美地区の逃げ地図を一緒につくろう！

逃げ地図とは、安全な場所まで避難するために必要な時間を色分けした地図です。今年2月に下田中学校の中学1年生らが作成して新着で大きく取り上げられました。今回は土砂災害にも留意した逃げ地図を作成します。

日時：平成26年12月11日(木) 午後7時～9時
会場：吉佐美区事務所(静岡県下田市吉佐美561)
講師：大下 康(千葉大学助教)・山本 隆哉(明治大学教授)
主催：吉佐美地区住民有志



吉佐美区事務所で行われたワークショップ

地元地域の中学生～大人を集めて

2014年12月下田市吉佐美区事務所で行ったワークショップを開催。中学生から高齢者までの20名が参加。4班に分かれて逃げ地図づくりを行った。しかし不十分な結果に終わった。

下田市の新しいハザードマップが各戸に配布されたばかり。今さら別の地図を作ってみても意味がない。矢印の通りにみんなが逃げるとは限らない。等の逃げ地図作成に否定的な声がかえった。

大人は具体的な成果を求めてしまう。頭が固い？



吉佐美地区逃げ地図=4枚作製

ならば小学生たちで

下田市立朝日小学校は一学年約15人、全校生徒 約90人の小さな小学校。校舎は鉄筋コンクリート造の2階建て。津波被災時の避難場所には指定されていない。

校長先生に逃げ地図づくりの説明をし防災教育の一環で、高学年生を対象に一度ワークショップを行わせてほしいと頼みこんだ結果、2015年度 6年生の総合学習(テーマ:防災。年間を通して学習する)に組みこんで頂くことになった。

しかしはたして小学生に地図がわかるだろうか？

対策そのI

※ おかえりマップ(逃げ地図と同じ縮尺1/2500の吉佐美地区の地図)

――逃げ地図づくりを行う前に――

朝日小学校から自分の家までの帰宅経路を、逃げ地図と同様に129m毎色分けをしていく。色塗りの練習になる。地図そのものに慣れる。



模型を見て吉佐美の地形を理解する様子

対策そのII

※ 立体模型(2014年に自分で作成した1/2500の吉佐美地区の地形模型)

模型の中の自分の家を見つけさせる。浸水想定区域の形に切った半透明のビニールをかけ、大津波にみたくて浸水域を想像させる。

担任教諭と共に 2015年11月 6年生11名が3班に分かれて逃げ地図づくりを行った。その後何度か実際に一時避難場所に行き子供達なりに周辺調査をし、問題点をチェックするフィールドワークを実施した。その後は子供たちが総合学習の時間の中で資料を作り 年度末の2月 はまぼう発表会(校内学習発表会)で大人の前で発表した。



はまぼう発表会でプレゼンしている6年生

逃げ地図づくり自体はそんなに難しいものではない。素直な小学生には逃げ地図がすんなり受け入れられた。(▽)/

No. 2 ■ ■ 工夫を凝らして毎年続けてきた ■ ■ ■

2015年度の 逃げ地図づくり→フィールドワーク→はまぼう発表会
この一連の流れは、子供達の防災についての学びに大きな成果をあげた。先生方にも高く評価して頂き 2016年度も引き続き小学校にお願いして同様に実施し、その年の子供たちは、さらに工夫を加えたまとめ方をして、堂々と地域住民の前で発表をした。(翌年以降も続けることとなる)

2017年度には 更に効果を上げる為の工夫も必要と考えた。

防災活動にアートの要素を組み入れた『キツネを探せ』を朝日小独自のバージョンで フィールドワーク時に体験してもらうことを企画した。『キツネを探せ!』の開発者のアーティストとその活動をサポートしている明治大学の学生さん達にご理解・ご協力を得て 実際に来て頂き、加えて数人の保護者に避難途中に遭遇する老人役を担ってもらい、子供達がどのような行動をとるのか。クロスロードゲームの要素を採り入れた『キツネを探せ In 朝日小』を実施した。多くの人達の協力のおかげで子供達は他では味わうことのできない価値ある経験をする事ができた。

2020年度には コロナ感染が広がり通常の形で行うことができないという問題に直面した。頭を寄せ合っただけの色塗りや会話はできないとのこと。

そこで地図を事前に分割したものを配り、各自が机でその範囲の道の色塗りし、後で貼り合わせて一つの逃げ地図を完成させる方法をあみだした。その後3年間この形式で行っている。

尚、2017年度からは『逃げ地図づくり』を5年生が行っている。

『キツネを探せ!』は 津波からの逃げ地図を活用した防災アートプログラム。(子供向けの防災プログラム) (開発者: 森脇 環帆 氏)



避難途中 老婆に遭遇。
私は迷惑をかけるので一緒に避難できないからあなた達だけで避難しなさい。全く動かない。そこで子供たちはどのような行動をとるのか?



実施後、アートの要素をもつ『キツネを探せ!』と逃げ地図づくりとを組み合わせることによって、子供達の防災行動の自主性のより向上に繋がったことを、アンケートの結果からよみとることができた。



フィールドワークの様子
ポイントとなる辺りは要チェック!

子供たちからの手紙



毎回フィールドワークの引率をする。子供達の色々な気づきの話声が聞こえてくる。意外な発見があって私にとっても興味深い。子供達と共に楽しみながら歩いている。時には防災以外の話も交えてなるべくコミュニケーションをとるようにしている。

コロナ禍をのりきった
分割作業による逃げ地図づくり

マスクをして自分の机で色塗りをする。
できたパーツを白黒の台紙の地図に重ねてのり付けして逃げ地図の完成。



大学・地域・家庭と連携して進める防災学習

<p>① DIG 学習</p> <p>防災委員の職員に地味ながら、地域の安全な場所や危険な場所を地図上に記していく。事前に、地域に協力してもらいながら、各自で下調べを持っていった。</p> <p>この時は、おれらからかー。</p>	<p>② おかえりマップ</p> <p>地域のAさんに指導していただき、学校から自宅までの避難ルートに色づけをしていった。事前に、地域に協力してもらいながら、各自で下調べを持っていった。</p> <p>学校から帰るまでにかかると時間は一。</p>	<p>③ 逃げ地図</p> <p>明治大学の方々から地図上で学区内の様子を見て、避難場所を「逃げ地図」にした。色づけは、書を基準にして行った。</p> <p>この場所は、まだ避難場所まで遠い。</p>
<p>④ 防災アート「キツネを探せ」</p> <p>明治大学の方々に協力してもらい活動した。いくつかの字がかりをもつキツネを探しながら、地域の避難場所に出向く。途中登場する「おれくん」や「避難避難」によって、子どもたちは避難に難しさを感じていた。</p>	<p>⑤ 防災委員見学</p> <p>防災委員や災害対策本部となる部員などを見学した。自分たちの経験について職員に質問してもらったり、避難訓練について、避難訓練の重要性を体験したりした。</p> <p>防災ってそんなに楽しく感じるのか。</p>	<p>⑥ 本で調べる</p> <p>学校図書室や公民館で、自分で調べた情報や体験カードを制作し、まとめのプレゼンテーションを行った。</p> <p>必要な情報を引いておこう。</p>
<p>⑦ 歩いて調べる</p> <p>「キツネを探せ」をきっかけに、学</p>	<p>⑧ 発表会</p> <p>学校行事「はまぼう発表会」で、これ</p>	<p>⑨ 担任教諭による年間活動のまとめ</p> <p>一年間かけて取り</p>

毎年出来上がる小学生作成の逃げ地図 (抜粋)



地元の建築家(私)と朝日小の子供達との逃げ地図づくりは当初私の方から学校に依頼して始まった。最近では5年生の担任の先生から年度初めにお電話で依頼を頂くようになった。気が付けば既に8回行っている。今年度(2023年度)も9回目を行うことになっている。始めた当時はまだ『逃げ地図』という言葉自体が新しい言葉で、その説明から苦慮していた。現在はその言葉も徐々に教育現場に浸透し、防災教育の一つの有効な教材になっている。

この学びによって、将来万が一津波が襲ってきたとしても地元の子供達には必ず助かってほしいとの強い思いで今まで続けてきた。同時に朝日小学校の「地域と共に学びを深める」という教育方針とあいまってここまで続けてこさせて頂いたことに感謝している。

考えてみるとこの活動の継続はまちづくりに繋がっている。子供達に始まり多くの地域住民に防災意識が広がっていくことが、防災のまちづくりである。同時にその子供たちもここで育っている。この辺りは夏の観光地でもある。ここが安心して海と向き合っている暮らしを願っている。災害はいつ襲ってくるかわからない。その時がくるまでこの活動を続けていきたい。

※ 子供達が作った折り畳みパンフレット



色々な防災情報が描かれている。自治会の回覧板で地域の人達に紹介される。



このパンフレットがある時朝日小学校の防災活動の様子を視察に来た下田土木事務所の県の職員さんの目に留まり、ユニークで分かりやすくしかも手作りしているところに感激し、事務所に持ち帰って所内の防災資料にしたとのこと。 ついに子供達の力で大人を動かしてしまった。(´0´)/(´0´)/(´0´)

※ PTA活動にも広がる

子供達には防災意欲が根付いてきていると感じている教頭先生から保護者の意識も重要、保護者の活動(家庭教育学級)の中に逃げ地図づくりを採り入れてみてはどうかとの提案があり、2022年度からスタートした。

2022年11月 1年生の保護者約10名で逃げ地図づくりを行った。「園での車による送迎とは違い、徒歩で小学校に通うようになった為、通学途中での急な災害を心配していた。逃げ地図づくりをやってみて緊急時の行動について家族で話し合いをしようと思った」「地域の防災訓練へしっかり参加しよう」等、意識の向上に繋がった。



2022年度

「逃げ地図、フィールドワーク」

朝日小 5年生 総合的な学習(防災学習)のまとめ

なぜ調べようと思ったか 地域の災害を知りこれからの地域学習に繋がっていきたいから

入田、多々戸地区の危険安全

安全な所
・避難所の高さが高い
・全体的に高さが高い
・色々な所に避難場所があるから安全

危険な所
・海に近いので津波の危険性がある
・避難場所ではないところは、高さが低い
・急な坂がある
・崖が多い



浜糸地区の危険安全

浜糸地区の危険
・避難所の高さが低い
・全体的に高さが低い
・色々な所に避難場所があるから安全

危険な所
・海に近いので津波の危険性がある
・避難場所ではないところは、高さが低い
・急な坂がある
・崖が多い



里下金原地区の危険安全

安全
・避難所がたくさんある。
・全体的に高さが高い
・海からかなり遠い
・防災意識が高い

危険
・古い建物やブロック壁が多い
・急な坂がある
・全体的に高さが低い
・崖に土砂災害がある

感想

- ・朝日地区の防災倉庫など場所がわかってよかった。
- ・この学習をして海が分かったり避難所の場所などが分かって良かった。
- ・朝日地区の危険がたくさん分かって驚いた。
- ・学校の周りの様々な危険や安全な場所が分かったりこれからの防災学習や地域学習に生かしていきたい。

担任教諭による年間活動のまとめ より



主体的に _____ ■ ■ ■ 活動を振り返って ■ ■ ■

- * 地域住民の一人の建築家が気にかけていたことを、公共の小学校が快く受け入れたことによってゆるぎない協働体制を築くことができた。
- * 小学校で行われている為、教育関係機関や行政機関のネットワークが働き情報が広く伝わった。

— 独創的に・新新に —

- * おかえりマップの導入、キツネを探せ!とのコラボ、コロナ禍での分割逃げ地図づくり等、独自に新しい方法をプラスしたことが楽しさを増幅させて、この活動の継続に功を奏した。

— 新たなモデルになるように —

- * 元々逃げ地図は、問題解消の為の新たな避難路や効果的な避難ビルを見出すツールであるがここでは、既に指定されている一時避難場所についての検証作業を主な目的とした。
- * 逃げ地図→フィールドワーク→校内学習発表会 この流れが小学校のカリキュラム'総合学習'にしっかりと組みこまれ、地域に発信する場を確立させた。

— 持続させ成長させていく —

- * 身近にいる子供達の安全を願う強い思いがこの活動を継続させていく原動力になっている。
- * 8年間続けてきたことで教員及びPTAや地域の人達に理解が広がり、活動が発展した。

— 周囲への波及 —

- * 子供から周囲の大人へ危機意識や防災意識を波及させ、結果的に防災のまちづくりに繋がった。
- * 朝日小学校のこれらの様子がNHKで放映されたり、建築学会や逃げ地図展等で取り上げられる機会が数多くあり全国的にも紹介されている。とてもありがたいことだと思っている。(´▽´)